「一同が一つになって」

使徒２：１－１３

挽地茂男

2020.5.31 日本基督教団千歳丘教会

五月も最後の日を迎えて、夏を思わせるような暑い日が多くなってきました。また健康に、特にコロナウィルスの感染に気をつけて、主の恵みに守られて歩みタイと思います。ペンテコステ（「五旬祭」と訳される）という名前はギリシャ語で「50番目（の日）」を意味するペンテーコステー（・ヘーメラ）πεντηκοστὴ ἡμέρα に由来しています。ユダヤ教において、過越祭の５０日後に祝われる祭（シャブオット［シャヴーオート］“שבועות”）のことです。この祭は、元来、春に得られる最初の収穫に感謝する農業祭でありました。ユダヤ教の三大祭［過越祭、七週祭、仮庵祭］の一つ《七週祭》（出34:22，申16:10）または《刈り入れの祭》とよばれ（出23:16）「小麦の収穫の初穂」を献げる日（出32:22）でありました。

七週祭の記念切手

イエス・キリストは、天に帰って行く前に、弟子たちに聖霊降臨を約束し、こう命じました。ルカ福音書２４章４９節。「24:49 わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい。」そして復活後４０日にわたって使徒たちに現われ（使1:3）た後、キリストは昇天されます。それから１０日後の出来事です。「聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける」（使1:8）と主イエスが約束されたとおりの出来事が起こります。

この聖霊降臨の物語のもつ意味とは何でしょうか。まず第一に①原始教会の成立における教会の理想型を提示することにあります。そして第二に②世界宣教の発端を示し、「教会の時」の始まり、つまり救いの歴史の転換点を示すことにあります。内容的には、キリスト教が、今や、ユダヤ人の民俗

キリストの昇天と聖霊降臨（ルカ24,使徒2）

宗教から世界宗教へと展開していく、その発端を語るのです。

五旬祭の出来事を見てみましょう。１－４節です。「2:1 五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、2:2 突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。2:3 そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。2:4 すると、一同は聖霊に満たされ、〝霊〟が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした。」

使徒言行録の著者であるルカの文章はまず、主イエスの約束が成就したことを語ります。「五旬祭の日が来て」という表現は「五旬祭の日が満ちて」という直訳が正確な翻訳です。つまりこの「満ちる」と表現は、ルカが救いの歴史を語るときの特徴、つまり「救済史」的表現の特徴を示している言葉なのです(ルカ9:51)。すなわち①旧約聖書の預言が満ちた、成就したことを語るのです。

その預言とはヨエル３章１－５節（口語訳ヨエ2:28-32＝使2:16-21）です。今日の箇所のすぐ後の２章１６－２１節に出てきます。「使徒2:16 …これこそ預言者ヨエルを通して言われていたことなのです。2:17 『神は言われる。終わりの時に、／わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、／若者は幻を見、老人は夢を見る。2:18 わたしの僕やはしためにも、／そのときには、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。2:19 上では、天に不思議な業を、／下では、地に徴を示そう。血と火と立ちこめる煙が、それだ。2:20 主の偉大な輝かしい日が来る前に、／太陽は暗くなり、／月は血のように赤くなる。2:21 主の名を呼び求める者は皆、救われる。』」

旧約聖書のヨエル書の文章も見ておきますと、ルカがこの預言をどのように理解しているかが分かります。「ヨエル3:1 その後／わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。あなたたちの息子や娘は預言し／老人は夢を見、若者は幻を見る。3:2 その日、わたしは／奴隷となっている男女にもわが霊を注

ぐ。3:3 天と地に、しるしを示す。それは、血と火と煙の柱である。3:4 主の日、大いなる恐るべき日が来る前に／太陽は闇に、月は血に変わる。3:5 しかし、主の御名を呼ぶ者は皆、救われる。主が言われたように／シオンの山、エルサレムには逃れ場があり／主が呼ばれる残りの者はそこにいる。」旧約聖書のヨエル書の預言に、ルカは、いくつか手を加えています。まずルカは、①聖霊降臨の出来事を「終わりの時」に神が行う御業と考えていて、終末的な出来事であることが明確化されています。②さらに預言をする者たちがイスラエル人の息子や娘たちという枠を超えて、「僕やはしため」つまり奴隷さえも霊を受けて預言すると、預言をする者たちの社会的身分を越えてその範囲が拡大されています。そして③ヨエル書に出てくる「エルサレム」は、今や救済の歴史（救済史）の始まる場所として、使徒言行録の出来事の文脈に組み込まれています。そしてこれらの出来事は、ヨエル書の預言の成就であると同時に、④復活の「主イエスの約束」の成就（ルカ24:29, 使徒1:4-5, 8）とされているのです。

さて１節で「一同が一つになって集まっていると」（ἦσαν πάντες ὁμοῦ ἐπὶ τὸ αὐτό［直訳］全員がいっしょに同じ所にいた）と言われているように、①集団に働きかける神は、それぞれ違う所でバラバラにではなく、一同が集まっているところに働きかけます。昔も今も、②教会が集まるということの重要性が語られています。しかしこれは、いわゆる集団主義とも個人主義とも一線を画しています。教会とは、集団の全体を生かすことによって、個人を生かす共同体なのです。教会は「キリストの体」と呼ばれる、一人ひとりが有機的な結びつきを持った共同体なのです。３節には、そのことが象徴的に語られます。「2:3そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。」つまり一人一人の上に、炎のような舌が分かれ分かれに現れて―大きな舌が全体をベロリではなく―各人を奮

い立たせていくのです。教会は集団が生きると同時に個人が生かされるところなのです。パウロは「一つの体としての教会」を繰り返し語ります。有機的な身体のような調和がキリストの体、教会の姿だからです。

２節はこの出来事の始まりに、「突然、激しい風が吹いて来るような音が聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた」（ἐπλήρωσεν ὅλον τὸν οἶκον οὗ ἦσαν καθήμενοι）と伝えます。直訳しておきます。ほぼ同じですが「突然、激しい風が吹いて来るような音が聞こえ、彼らが座っていた家全体を満たした。」風の音が家全体に満ちたのです。そしてこれが、４節につながります。「一同は聖霊に満たされ」た。つまり「家全体」も人々一人ひとりも「満たされた」と語るのです。「空虚が取り除かれ」たのです、家にも人の心にも「隙間が無くな」ったのです。さらに「満ちる」という表現は、「五旬祭の日が満ちて」につながります。救いの時が満ち満ちてきたのです。救済の歴史の満潮時を迎えたのです。ここに記されるような出来事自体は、人々にはよく理解できないところがあるのがふつうです。１３節には人々の反応がこう書かれています。「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」。神の働きを素面で受け止める人は、傍からみれば、酔っぱらいに見えるのです。

エル・グレコ「聖霊降臨」

このような反応は、教会が静かな、また密やかな黙想を大切にする群であると同時に、単に、静かな穏やかな集団であるだけではなく、主が与える生命の活力に満ちて[動いて]いることを証ししています。つまり、この動きが聖霊の臨在を証しします。

突然耳にした「激しい風が吹いて来るような音」は「天から聞こえ」てきた、と語られています。それは天から吹いてくる、天来の風の音、その風の神的起源を示しています。それは神から吹く風です。風（πνοή）という言葉は、聖霊（πνεῦμα ἅγιον）というときの、霊《πνεῦμα》という言葉と同義語

なのです。また霊《πνεῦμα》という言葉は、〈息〉とも〈風〉とも訳される言葉です。ここに登場する《風》《炎》《現れる》（ὤφθησαν）という言葉は、旧約聖書では神が現れる時に使われる、神顕現を示す具象的な表現なのです。

また《舌》（γλῶσσαι）という同じ単語は、４節と１１節では「言葉」とも訳される言葉で、６節、８節の「言語」（方言 διάλεκτος）を予想させる単語です。神の霊は風の中に、また火のような舌の中に、そしてついに人々の言葉（預言）の中に現れるのです。

この出来事を見て、人々は驚嘆します。５－１１節。「2:5 さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、2:6 この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。2:7 人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。2:8 どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。2:9 わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、2:10 フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、2:11 ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もおり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉（ταῖς ἡμετέραις γλώσσαις）で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」

５節には「エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信

心深いユダヤ人が住んでいたが」と記されています。イエス時代のユダヤ人人口の記録が残っています。ローマによる人口調査の数字だとされていますが、それによると当時のユダヤ人人口４５０万人。そのうちパレスチナには５０～７５万人が住んでいたと言われています。つまり国外に、３７５－４００万人。国内の８倍ちかい人たちが、外地にいたことになります。戦乱やその他何らかの理由で外地に逃れたり、バビロン捕囚などで外地に連行されたりして、このように外地に生活拠点を持つようになったユダヤ人を「ディアスポラ」のユダヤ人、離散のユダヤ人といいます。

主イエスの弟子たちは、ガリラヤ出身の人たちでした。外地からエルサレムに帰ってきていたディアスポラの人たちを驚かせたのは、このガリラヤの人たちが、自分たちの生まれた外地の言葉(方言)で話しているという事実でした。さまざまな方言――つまり彼らの生まれたもう一つの故郷の言葉（τῇ ἰδίᾳ διαλέκτῳ）――が聞こえてきます。しかしそれらの幾つものさまざまな外地の言葉(方言)が語っているのは一つのこと。「神の偉大な業」（v.11 十字架と復活による救い）なのです。専門家はこれを「多言奇跡」と呼びます。使われている言葉（各地の方言）は違っていても、語られている内容は一つの共通した内容なのです。異なるさまざまな言葉が、一つの同じ内容を語っているのです。

つまり創世記１１章の「バベルの塔」の事件を逆転したようなことが起こっているのです。バベルの塔の事件は、人間が一つの言語であったため、その言語によって人間は容易に自分たちの総意をまとめ、その総意に悪意がはらみ、神をも恐れぬ「人間の偉大な業」を誇示する文化的傲慢に向かって行きます。創世記にはこう書かれています。「11:4 彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有

名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った。」神はこれを見て、人間の言葉を混乱させ、一つの言語を多くの言葉へと多言語化して、その言葉の混乱によって、人間の意思疎通を疎外し、人間の文化的傲慢を砕かれます。聖霊降臨の出来事とは、多言語ながら、聖霊の降臨によって、一つ思い（神の霊＝神の思いと力）を注いで言語の壁を超える物語であります。バベルの塔の言葉の混乱の癒しの物語でもあるのです。聖霊降臨は人々の真のコミュニケーションの新たな可能性を示しているのです。

ガリラヤの人々が他国の言葉で「神の偉大な業」を語る姿は、世界宣教を先取りしています。この箇所に示された「民族表」は①パルティア、メディア、エラムからの者（v.9）――つまり東方の人々から、そして② メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、2:10 フリギア、パンフィリア（v.9-10）――北西の民族へと進み、さらに③ エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者（v.10）――南西へと拡大し、④ ローマから来て滞在中の者（v.11）、⑤ ユダヤ人も、ユダヤ教への改宗者もおり（v.11）、⑥ クレタ、アラビアから来た者もいる（v.11）と展開します。つまりこの民族表は、西方の「海洋民」と東方の「内陸民」の全体を含んでいるのです。

ルカはこの世界宣教の見取り図を１章８節では、アングルを変えて、段階的な発展の図式として示しています。「1:8 あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」つまり首都エルサレムから、はじまって、エルサレムを含むユダヤ地方一帯へ（東京から始まって関東地方一円へといったような拡大図

式です)、さらにユダヤ人と異邦人の混血と見られた境界線地域としてのサマリアを越えると、一気に異邦人の世界、地の果てへと拡大します。わたしたちの教会もこの図式から漏れていません。この図式の中に置かれていることを十分に理解しておく必要があります。

いずれにせよ、どちらの図式でも、宣教は「聖霊に満たされて」（2:4）行われることが分かります。つまり聖霊が世界宣教を行うのであり、使徒たちはこのために用いられる道具に過ぎないということ、昔から言われるように使徒行伝は聖霊行伝なのです。これを十分に自覚している必要があります。この自覚がなくなるとき、わたしたちは牧師の偉大さを語ってみたり、受洗者の多さを誇ってみたり、教会予算や教会建築の規模の大きさを自慢してみたり、「人間の偉大な業」の虜になるのです。しかし神の教会の真の推進力が、神の力と思い――つまり神の霊、聖霊――であることを理解する（under-stand=下に立つ）とき、実に人間を通して働かれる神を知り、その御業を誇る者になるのです。パウロは言います。ローマの信徒への手紙１５章１７－１９節。「そこでわたしは、神のために働くことをキリスト・イエスにあって誇りに思っています。キリストがわたしを通して働かれたこと以外は、あえて何ももうしません。キリストは異邦人を神に従わせるために、わたしの言葉と行いを通して、またしるしや奇蹟の力、神の霊の力によって働かれました。」わたしたちが神の教会の真の推進力を理解（under-stand）するとき、恵みのうちに「神の偉大な業」が継続されることを理解（under-stand）し信じることができるのです。人の働きの中に、神の働きを理解し、そこに救いの歴史の一こまを確認し、神の御業が継続されることを期待し続けることができるのです。

聖霊の霊という言葉《πνεῦμα》は霊とも、息とも、風とも訳せる言葉だと申し上げました。霊も息も風も、目には見えませんけれども何らかの結果を残していくのです。ヨハネ３章８節はこのように

語ります。「3:8 風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」

ふうてんの寅さんを主人公とする「男はつらいよ」という映画がございますが、その中にお決まりのシーンがあって、マドンナが旅立つ寅さんに「お兄さんどちらへ？」と聞きますと、寅さんが「風の向くまま、気の向くままよ」と答えます。主演の寅さん役の渥美清さんは、最後は病床洗礼を受けて召されていった方ですが、聖霊の導きは、時に形にとらわれない、風に吹かれるような自由な一面があるのも事実です。

また聖霊に導かれて歩むということは、神と息、呼吸を合わせて生きること、と表現することもできます。合唱では――聞くところによりますと――隣の人の呼吸に自分の呼吸を合わせることが、よいハーモニーを生むと教えるそうです。祈りは霊的な呼吸であり、そのなかでわたしたちは神の息にあわせて生きることを学ぶのです。① 聖霊によって、わたしたちの中に生き、教会の中に生き、聖書の中に生きておられるキリストをより深く知る事が出来ますように。また②一人ひとりの働きが大切にされ、それが全体として一つの大きな働きとなりますように。③ わたしたちの教会の働きが、聖霊に導かれることによって主イエス・キリストの十字架に示された神の愛を具体的に証しするものとなりますように。④ 聖霊に豊かに満たされ、神の栄光を現すことが出来ますように。⑤ 聖霊の働きを通して、神の恵みがわたしたちの教会に豊かにありますように。

新しい１週間の歩みのために、祈りましょう。

2020.5.31　日本基督教団千歳丘教会